水上勉全集

7

水上勉全集　第七巻

昭和五十二年九月一日印刷
昭和五十二年九月二十日発行

著者　水上勉
発行者　高梨茂
印刷者　白井倉之助
発行所　中央公論社
東京都中央区京橋二ノ一
電話(五六一)五九二一
振替東京二一三四
検印廃止
©一九七七

目次

銀の庭　3
霙　257
湖の琴　299
あとがき　635

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook

銀の庭

目次

第一部　銀の庭　5
第二部　緋の庭　96
第三部　金の庭　178

第一部　銀の庭

一

方丈と東山堂の南に、東山大文字からつづいてくる、なだらかな小山がみえる。そこから東南の方へややはなれて、月待山とよぶ赤松の疎林がある。庭は、朱いろの松の樹肌が青みどりの葉の中へつきさしたようにみえる山景を借りている。圭子の生れた寺は、史蹟名勝として名の高い聚閣寺である。

庭の広さは一町四方ぐらいしかないので、北山の芳閣寺にくらべるとずいぶんせまい。しかし、狭いだけに、かえって眼近にせまってみえる樹木の多い山麓は、芳閣寺よりもしたしみぶかくて落ちついてみえると人はいった。庭のまん中に錦鏡の池がある。足利義政の法衣を着た像のまつってあるこけらぶきの東山堂前面と、例の聚閣の前面とに庭は分れているが、二つの庭は接続部のところで、池もろとも美しくくびれてみえた。

さしわたされた灰色の自然石の龍脊橋を境にして、池は南北に細長くのびている。中央の中島と池のまわりをかためた立石や横石を配したおだやかな景観は、いわゆる池泉廻遊式で、いかに

も八代将軍義政公が東山の銀閣寺と一しょに愛した山荘にふさわしい名園といえたかもしれない。

ところが、この庭の西北の隅の、つまり本堂の南面にあたるところに不思議な砂盛りが二つあった。高さおよそ二尺ちかい四角な砂盛りを銀砂灘とよび、上は線状の文様の筋がいく本もえがかれている。その西南に高さ約五尺の円錐形で、上方をまるで刃物で削り落したかにみえる傾月台とよばれる砂盛りがある。白々とした大きな二つの砂盛りは、唐門をくぐってすぐ眼につくから、人びとは砂の白さと、形の異様さに先ず眼をみはるのだ。池泉と樹木と石との配合された水墨画のような古びた庭を背景に、純白の砂の高盛りにしてあるのは、普通の禅寺の方丈前庭園とは変ったかんじがするからであった。

圭子は方丈前のこの砂盛りのあるあたりをあまり好まない。圭子が好きな庭は、むしろ祖父の演宗が、庭師をつかって掘りおこした山裾の一だん高いところにある石組みの庭である。

「お母ちゃんがここへお嫁にきたころやったわ。お爺ちゃんが男衆さんをつかって、毎日精出して掘りおこしてはったもんや。あそこはまだ山やったわ」

と母の志保は圭子にいったが、掘りおこす前は山つづきの岩壁だったらしく、山裾に土の流れをくい止める石積みがあった。東北の隅にも見事な石組みがみられたし、まん中あたりには、清水のわき出る池がかくれていて、これも八代将軍義政が愛したお茶の井泉だとあとでいわれるようになっている。この水が南流して、下方の池泉にそそぐのである。流れの両岸にあるとびとびの白やまだら石の縦横無礙の石組み。曲り角にある古い建物の礎石の跡。そんな石の古庭を約三百坪にわたって発掘した祖父は、当時、学界をおどろかせたといわれている。この発掘によって、

聚閣寺の庭は枯山水の石組みを新しく追加したことになったからである。

「お母ちゃん、こんなひろい庭、誰がつくらはったんや」

圭子がきくと、志保は、

「相阿弥はんや」

とおしえた。相阿弥とは妙な名だと子供心にも思ったものであるが、圭子は、大きくなってから、この作庭者は母の教えた相阿弥ではなくて、善阿弥という下賤の河原者だったと書かれた本をよんだことがある。その男は、義政に見出されて、この石の庭をつくったのだそうだ。相阿弥は直接作庭をする技術者ではなくて、義政の許に通って書画骨董の管理をした人にすぎない。作庭者は河原者の善阿弥だったというのだった。

「善阿弥はんがつくらはったんや」

もとより、圭子はその庭師の顔を知る由もないが、圭子の寝ている庫裡の二階から、東山堂の東北面にあたる祖父の掘りおこした枯山水の庭がどこからよりも眼近に眺められるので、河原者の善阿弥という男が今から五百年も前に将軍様に使われて、重い石をはこびあげていく背姿が、頭に思いえがかれることがあった。

東の山裾の枯山水を発掘した祖父の死んだのは、圭子がまだ法然院下の小学校に通っていたころのことである。聚閣慈済寺の第十七代目の住職であった栂演宗は、昭和二十年三月に死んだ。圭子の父春泉に似て鼻が高く、きりっとしまった顔だちをしていた。色も白く、七十二で死ぬまで、つやつやした肌をしていたが、庫裡のひと間で窓口の梅の枝をみながら大往生をとげた。死

因は老衰による心臓衰弱である。つづいて圭子が中学二年の夏、お婆ちゃんとよんでいた演宗の妻の時子が死んだ。庫裡の仏の間でやはり息をひきとった。これも老衰であった。

圭子には三つ年下の妹の智子がいた。智子も庫裡の二階の六畳で一しょに寝ていたが、祖父が死ぬと、父の春泉が副住職から新命住職となり、晋山式を終えて、第十八代目の聚閣寺の「長老はん」になった。栂一家は四人となり、母の志保の親許から、伯母の藤野が手伝いにきて五人暮しになった。寺の財源ともいうべき庭園と聚閣の拝観料をまかなう傭人の高田繁治郎と樽林一平のほかに、案内や、掃除をつとめるアルバイトの学生が五人。これが、聚閣の庫裡に住む人びとであった。

祖父の死んだ終戦のころには、まだ、聚閣寺にはそんなに拝観者はなかった。したがって五人のアルバイトの学生もいない。祖父の代から寺男をしている頭のはげ上った高田と樽林のふたりきりであった。しかし、昭和二十五年の七月、北山の芳閣が不慮の火災によって焼失してしまうと、にわかに拝観者がふえてきた。もっともなことといえたかも知れぬ。

砂盛りのある白い庭も、枯山水の演宗の掘りおこした庭も、池泉廻遊式の錦鏡池も、国宝に指定された「聚閣」「東山堂」も、拝観料をもらって、人びとに見物させる価値は充分あったといえよう。臨済宗燈全寺派の別格古刹として北山芳閣、東山聚閣の名は古くから京都名所の図鑑を飾っていたし、名を競った由緒からみても、焼失した芳閣への絶望感から、国宝のまだ存置されている聚閣寺の方へ観光客が殺到したとしても不思議でなかったのである。

当時、拝観の差配をうけもっていた高田繁治郎が、中門の前に建てられた箱のような建物に、

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook

「拝観受付」と看板をかかげ、客から一人二十円ずつもらいうけて、ボール紙の菓子函に集め、一日の料金を庫裡の奥にいる春泉と志保の部屋へ日課のようにして運んできた。志保は、日増し にその金額がふえてくるのにびっくりした。多いときは一日三万円はあった。春秋の旅行季節がくると、修学旅行の学生たちが門前にあふれた。白砂の庭も、黒い洋服で蟻の密集のように埋まった。昭和二十九年、聚閣寺は年間収入、約一千二百万円をあげている。

観光客を目あてに、聚閣寺門前から、市電通りに向う一直線の細い浄土寺町とよばれた両側の家々は、八つ橋や聚閣寺納豆を売る土産物店に変った。絵はがき、こけし、京人形、絵入りタオルなどをならべる商店もあった。地価も急騰した。商魂たくましい門前のしもたやの男は、あまし酒、うどん、という看板を掲げた。せまい石畳の門前に、行列をつくる観光客を吸い入れようと躍起になったのである。門前町の変転ぶりをみてもそのようであるから、多大の収入をあげはじめた聚閣寺内の庫裡生活もまた急変したことは勿論であった。

栂春泉は、父親の演宗に似て、背高い大男だった。鼻梁のたかい造作のととのった顔をしていた。圭子はこの父の顔を「人の好い」顔だと思う。父は澄んだ眼をしてるとも思っているが、その春泉の顔も、終戦の苦しい時期に祖父を死なせていたから、毎日暗い顔がつづいていた。じっさい終戦早々は経営も苦しく、まったく売り喰いがつづいていた。

春泉と志保は、亡父の演宗からわずかな金しか受けていなかった。演宗の死んだ時は、五万ぐらいの金があるきりだった。拝観料も皆無に等しかった。しかし、義母が死ぬとき、志保は、百万円ぐらいに相当する門前の土地を貰っていた。それはいってみれば、禅宗寺院に嫁してきてい

た一人の女が、庫裡の隅で、住職に囲われてきたものの、いざ夫に死に別れてみれば、本山燈全寺の意向によって、後住の決められる慣習には逆らえない。老後の生活は保障されていない。そのことのために演宗が内々に時子のために積みたてていた金を、不動産にしておいたもので、これを時子は春泉の嫁志保に譲ったのである。といってそんな土地に手をつけられるものでもなかった。

庫裡での暮しは、当時の日本のどの家庭とも同じく配給食に飢え、春泉も志保も圭子も智子も蒼白い顔になってくらしていた。ところが急に拝観料がふえてくると、圭子たちの着るものも、父母の着るものも、食事もにわかに変った。台所には、出入りの魚屋の鷲本市次が住み込むようになり、調理をひきうけてお居間の圭子たちにもお膳をはこんでくる。門前の洗濯屋の町田は、毎日、クリーニングの自転車をとめて御用聞きにきた。

春泉が圭子と智子にピアノを買ってきたのは昭和三十年の四月のことであった。圭子が今出川にある同志社高校から授業を終えて帰ってくると、庫裡の「お居間」のつぎの納所のわきに、黒ぬりのぴかぴかに光ったピアノが置いてあった。

「だれか、ええ先生よんで、習ろたらええ。お母ちゃん、さがしたってェな」

と春泉は澄んだ眼をほそめていった。

「和尚さん、そんなこといわはったかて、お寺の庫裡からあんた、ポンポン、ピアノの音がしたら変に思われしまへんか」

と志保が、高田や樽林に気がねするような顔つきでいうと、

「誰が変に思うかいや。寺の子ォかてピアノぐらいたたくわな。坊主が木魚たたくのと一しょや。女の子ォがピアノぐらい買うてもろたって何でもないやないか。かめへん、かめへん」
と春泉はいった。
「そやかて長老はん、禅宗の寺やおへんか。高田はんや樽林はんかて変に思わはりまっしゃろ」
「なにいうてんね、月給あげたるし、アルバイトも同志社と大谷大学から三人よけい工面するようにいうたるがな」
春泉はそういうと、毛のはえた先のふとい指で、新品のピアノのふたを無造作にあけて、ぱんぱんと鍵をたたいた。どこでならったものか、春泉のその指は、ドレミファソラシドと正規の音をつたえた。その音は、煤けたはり木の組み合わさっている天井の高い庫裡に、吸われるように不調和な音をひびかせたのである。
「お父ちゃん、どこでピアノなろたん」
圭子は嬉しくなった。刺繍の被いのあるみどり色の丸椅子もちゃんと買ってくれている。父のゆきとどいた心づかいに、智子とふたりで何ども飾りのある椅子を撫でていると、春泉はいっそう眼をほそめていった。
「お父ちゃんかて、音楽的素養はあるでェ。お経やかて本山でほめられるほどうまいんやぞ」
志保は、自分に似て細面の顔をしている圭子が、妹とちがって平生からどこか無口で陰気なところがあったのに、めずらしく両頬をほころばせてピアノに見惚れているのをみて、眼頭があつくなった。志保は瞬間、自分たちの時代が来たような気がした。

この年、春泉は四十九、志保は四十三であった。志保は二十四のときに、当時副住職であった春泉のところに嫁にきているが、決して心から楽しかったとはいえない。演宗長老とその妻の時子に、十数年もつかえた。副住職の妻だから寺の経営に口出しは出来なかった。ただひっそりとかくれるようにして無双流の華道を習いおぼえていた。それぐらいが楽しみで、祖父母のいるころはずいぶん気苦労な思いもしたと思う。ところが、終戦を前に老父が急死すると、つらい食糧事情の竹の子生活がしばらくつづき、母の死のあと、やがて、急に夢のような拝観料の増収で裕福な暮しができるようになったのだった。

智子を生んで間なしに胸を患い、病院にも永らく入っていた志保は、当時医者のすすめで手術をしたため、細面の小造りな美貌ではあったけれども、顔いろはすぐれなかった。ところが、急に庫裡の生活が楽になりはじめると、頬のあたりに紅みがさした。生々してきた。

志保がとつぜん夫の春泉の買ってきたピアノをみていて、いよいよ自分たちの時代がきた、と思ったのは、あとになって考えてみると、志保の身勝手な安堵感のようなものにすぎなかったかもしれない。思いちがいだったと悟る時がくるのだが、しかし、当時、志保はたしかにそのように思った。ようやくにして、人なみの暮しが出来る時代がきたと思ったのである。

二

白砂の庭にかきつばたの花の咲くのは、東山堂の裏側にある足利義政の茶室蓮清亭跡の池畔である。

そのかきつばたは、白まだらの石組みの裾いちめん青い岩ごけの生えるあたりに、十株ほどの紫の大きな花弁をひろげている。志保はこの花が好きであった。ちょうど、春泉が娘たちにピアノを買ってひと月ぐらいしかたたない日である。

五月十六日のことだった。河原町通仏光寺を西に入った檀家の栗林家から法事の依頼があり、春泉が読経に出かけたのは正午である。紫衣の上に好きな藍無地の被布を着て、お居間の縁先で、折から近所の娘たち三人をあつめて、舟形花器にかきつばたを活けていた志保のところへ、

「早よもどってくるでな」

と春泉はいいにきた。聚閣は燈全寺派別格地、慈済寺が本名であるから、やはり住職は檀家の葬祭法事は一切取りしきらねばならない。その日は、栗林家の亡妻の三周忌にあたっていた。ところが、いつもなら、早く帰ってくるといって出れば、必ず三時か四時に帰ってくるはずの春泉が、夜更けに帰ってきて、めずらしく酒気をおびていた。

「和尚さん、お酒よばれてきやはったン」

すでに圭子も智子と二階へあがって寝しずまっていた。志保は、お居間の机で、夕刻高田の置いていった拝観パンフレットの「聚閣とその庭園の観方」という刷り物の校正をしていたのだが、お居間へにゅっと入ってきた春泉が、うっすら赫らんだ顔をしているのでペンをおいた。と、にわかに志保は単衣の襟をあわせた。春泉の射すくめるような眼が気になったからである。酔っているために殊更すわっている眼だとは思えない。怒ったような光りがあった。

「なんどす、和尚さん、そんな目ェしやはってェ。これ見とくれやすな。こんどつくりますパン

フレットどっせ。芳閣はんも、お客さんに切符と一しょにわたさはるそうどすさかい、うちも真似せんとあかん思うて、このあいだ門前の印刷屋はんにたのんどいた説明書どすがな。高田はんが頭ひねってつくらはりましたンどっせ」

印刷されたザラ紙を手に渡そうとすると、春泉はむっとして受けとらず、立ったままひくい声でいうのだった。

「そんなもん、あとのはなしや。えらいことになりよった」

その顔が、泣きだしたいような歪みをこらえている。志保にはよくわかるのである。

「どないしやはったンや、和尚さん」

「……」

春泉はしゃがみこむと机の上に肘をついた。心もち人よりも大きくひらいた耳たぶのあたりに掌をあてて考えている。額に青筋をたてている。

「いうとくれやすな、なんどすのや」

志保は胸がさわいだ。と、春泉がいいにくそうな声をだした。

「困ったことになりよった。どうせばれてしまうことやから、隠さんというてしまうけどなァ」

何か悪いことをしたみたいに、被布の前合わせを心もとなさそうにはずしながら、

「『毎朝新聞』の夕刊にな、根も葉もないこと書かれてしもた」

「『毎朝新聞』？　そら、なんどすのや」

「わいがな、寺の銭使こて、女にほうけておるのンがいかんいうてな。ごっついこと書いていよ

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook